

# 小児外科

## 診療科の紹介

当院は、特色の一つに小児救急・小児総合医療センターを掲げています。そのため、北九州市のみならず近隣の市町村を含めた北九州医療圏の小児医療を担っている施設と言っても過言ではありません。そのため外傷や急性期疾患、虐待など、外科的処置の必要な子どもたちが大勢運ばれてきます。小児科医のみならず脳神経外科、形成外科、整形外科、泌尿器科と手を合わせて合同で診療に当たることが必要になります。その中で小児外科は、腹部や胸部の疾患に対応出来るように心がけています。

## 診療科の特徴・強み

現在常勤の小児外科医は1人のため、他科のように“小児外科”独立で診療に当たることは困難であり、小児科医と一緒に診断・診療を行い、成人外科医とグループになって手術を行なっているのが現状です。

また小児外科は2019年12月北九州市立八幡病院が新病院に移転するに当たり、正式に標榜出来るようになりました。さらに日本小児外科学会教育関連施設に認定されているため、大学へ手術応援を依頼することで高度先進医療手術を提供出来る状況にあると考えています。小児外科を目指したいという若手医師の研鑽の場になれるよう、また研修医が小児外科に少しでも興味を持ってもらえる場になるようにする責務があると思います。

一方、当院が現在産科を休診しているためにNICUが併設されていません。そのためどうしても新生児疾患に関しては、他の総合病院の小児外科に頼らざるを得ない状況が続いており、今後の課題として捉えていく必要があります。

## 小児外科診療実績

	2022	2021	2020	2019	2018	2017	2016	2015	2014	2013	2012	2011
急性虫垂炎	57	61	51	44	70	65	69	64	65	56	49	52
鼠径ヘルニア	19	27	21	21	28	28	21	30	48	31	16	28
手術合計	119	142	93	117	144	129	115	111	123	104	89	91
内視鏡（鎮静下）	47	44	50	34	57	44	31	25	7	0	0	0

## スタッフ紹介



小児外科主任部長  
**新山 新**  
しんやま しん

## 取り扱う主な疾患

小児外科としては、16歳未満の手術を年間110件前後行なっています。2020年に新型コロナウイルスの感染拡大が始まり、その影響から100件を下回る時期がありましたが、2022年は119件と例年並みの手術件数でした。小児（16歳未満）急性期疾患として最多は急性虫垂炎であり、平均50件程度で2022年は57件でした。全例腹腔鏡下、しかも単孔での手術で完遂しています。その次に多い疾患は外鼠径ヘルニアで、20件から30件程度手術を行なっています。

その他には、自然気胸や卵巣嚢腫・卵巣奇形腫、胆道拡張症手術、化学療法を行うための中心静脈カテーテル挿入術、などの手術症例があります

16歳未満の小児に限らず、16歳以上の重症心身障害児のお子さんたちに対する気管切開術、喉頭気管分離術、胃瘻造設術などを行なっています。

小児外科は、今後も小児に携わる外科として他科と連携を保ちながら、また教育関連施設として教育にも努めながら安全な診療を心がけていきます。